

## 令和2年度第3回法政策等フォーラム型実験小委員会議事概要

- I. 日 時：令和3年2月13日（土）16:30～18:30
- II. 場 所：公益社団法人 私立大学情報教育協会事務局 ネット会議（ZOOM 使用）
- III. 出席者：中村主査、高嶋委員、佐渡友委員、井上委員、菊池委員  
事務局：井端事務局長、中村

### IV. 検討事項

#### 1. 2020年度「法政策等フォーラム型授業」の実施計画と実施結果の確認について

当初、2大学(神奈川大学、京都産業大学)3チームで開始予定のところ、京都産業大学の1チーム7人の内、参加が1名となり、実質的には神奈川大学2チームで、10月から12月にかけて試行した結果について、2チームから以下のような報告が行われ、後日資料の追加等を行い、最終報告とすることを確認した。

#### (1) 神奈川大学 (中村チーム:2年生の4チーム、21名)

【実施期間】2020年10月22日～2020年12月10日の8回(コマ)、オンラインで実施

【テーマ】ジェンダーの不平等や差別の解消、気候変動・陸および水域の豊かさ

【有識者及び大学院生の参加】

天羽優子氏（山形大学理学部物質生命化学科准教授）

大矢 遥氏（神奈川大学大学院法学研究科修士1年）

【授業の進め方】

- ① 学生各自にSDGsの各ゴールを割り当て、各自その内容について調査して発表する。学生はその方面の専門家の立場で意見を述べさせた。
- ② 国連が発表した2020年度の各国の達成状況を俯瞰し、日本が遅れていて早急に取り組むべきポイントを発見させ、その原因を考えさせた。
- ③ 問題解決のなかで、現下のコロナウイルス感染症の拡大がいかなる影響を与えているのか考えさせた。
- ④ 解決方法について、倫理性・実現可能性（資金や時間的スパン）、社会問題への影響を考えさせた。
- ⑤ 外部有識者として、山形大学の教員に協力を求めたが遠隔授業などで多忙のため学生との踏み込んだ議論にまでは至らなかった。

ディスカッション開始	返信	最新の投稿
プロモーションにおける性的搾取について語ろう	14	十六夜の超新星_ 2021年02月15日(月) 20:38
コロナウイルスは日本社会にどのような影響を与えたか	6	nakamura toshiro 2021年02月12日(金) 14:37
性教育とジェンダーについて	2	十六夜の超新星_ 2021年01月21日(水) 14:56
とりあえず自己紹介しましょう	45	つちー_ 2020年11月25日(水) 23:56
COVID-19の拡大は「日本における環境政策」にどのような影響を与えるのだろうか	23	くもり_ 2020年11月25日(水) 18:04
SDGs各ゴールの理解を深めようぜ	43	くもり_ 2020年11月25日(水) 17:26
高等教育とジェンダー、職場や職業選択など...	0	井上 匡子 2020年11月11日(水) 06:53
異国とジェンダー	0	井上 匡子 2020年11月11日(水) 06:50
COVID-19の拡大は「日本におけるジェンダー平等実現」にどのような影響を与えるのだろうか	35	まーふんふん a.k.a. 美濃うたげ 2020年11月10日(火) 01:50

#### 【実施結果】

- ① おおむね計画通りに実施できた。
- ② 遠隔授業形式で実施したため、ゼミの授業時間中に各自がネットワーク上の情報を集め、直ちに全員で検討できたことで、内容の充実に繋がった。
- ③ 社会において現在進行形で女性蔑視発言や、企業プロモーションにおける性的搾取の問題が恒常的に生じていることもあり、ジェンダーの問題を深く考える上で、学生から新しい事件の報告・資料が活発に追加され議論が活性化した。

- ④ センシティブな画像やホームページを取扱わざるを得ない著作権上の取扱いとして、教員による一定のコントロールが必要であった。

【実施準備のための説明動画】

<https://c.logosware.com/fwqxqu/GwWLL/r/index.html>  
<https://c.logosware.com/fwqxqu/gC543/r/index.html>

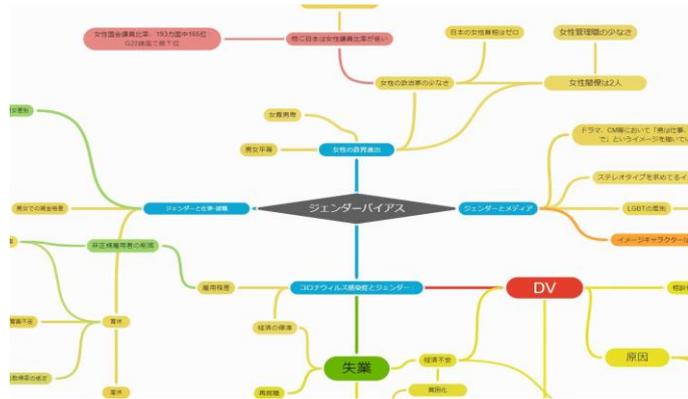
【フォーラムの状況】 総記事数 176

<http://gekogeko.lms.ac/mod/forum/view.php?id=6>

【フォーラムでを使用した ICT ツール】

個々の学生がフォーラムで意見を表明する前段階の知識整理や理論構築の一助とするためのツールとして、Coggle を利用した。

Coggle は、オンライン上で簡単なマインドマップを作成するための ICT ツールである。これを活用することにより、個々の学生は、複数の学生が一つのマップを構築していく過程で、いわゆる集合知(集団的知性)の中で自分の基本的立場を確認しつつ、自分の感性や思考を他者のそれと相対的に理解するという経験を得ることができる。



(2) 神奈川県 (井上チーム: 2年生2チーム10名と3年生1チーム6名)

【実施期間】 2020年10月27日～2020年12月15日の8回(コマ)、オンラインと対面で実施

【授業の進め方】

- ① 学生がそれぞれ興味を持ったゴールについて調べ、発表した。ジェンダーに関わるゴールや課題を担当した学生は、SDGsのすべてのゴールに関わるものであることを踏まえ、ジェンダーの視点から当該課題を検討した。
- ② お互いの報告を通して、それぞれのゴールや課題が密接に関連していることを理解した上で、統計データなどを用いてチームとして取り組む問題・課題を洗い出し、絞り込みをしたが、学生の興味・関心にばらつきが見られ、テーマの絞り込みに苦労した。
- ③ 既に実施されている施策や取組みを調べ、何故それが期待通りになっていないのか考えた。
- ④ 問題解決のための施策を提示し、その倫理性や実現可能性についても検討した。
- ⑤ 中間報告・最終プレゼンは、2年ゼミ・3年ゼミ合同で実施した。最終プレゼン会(ハイフレックス型)には、これまで講義の中で様々な協力をお願いしてきた「NPO 法人かながわ女性会議(理事長吉田洋子氏)」を遠隔で招き、講評を得た。
- ⑥ ゼミは遠隔・同期型で実施したが、6コマ目の中間報告と7コマ目の最終報告は、対面と遠隔を組合せたハイフレックス型として実施した。

【実施結果】

- ① 知識の習得は、遠隔でも十分な効果が得られることが確認できた。情報収集能力は、資料の提示などを即座に行うことができることから、対面授業よりも遠隔授業がより実習的な方法で指示できた。
- ② 論理的思考力・ディスカッション能力は、Jamboard や Miro などのアプリを用いた学修により、かなりの程度涵養できるという手応えがあった。
- ③ Zoom は、「同時に2人が話せない」ことから、プログラム初期段階でのディスカッションや論点整理などにデメリットがあり、工夫が重要である。
- ④ これまで一度も対面での演習を経験していない2年生と、昨年度後期に対面のゼミを経験している3年生との間には、質的な差が見られた。
- ⑤ 学生の反応は、大きなテーマが「ジェンダー」であったこともあり、興味を持つ学生が多かった。

また、ゼミ自体を遠隔で実施して、幾つかのアプリケーション(Jamboard、Miro、Teams など)の使用と、Moodle の掲示板にかなりの負担感があつた。

- ⑥ 中間報告と最終報告は、2年生のゼミと3年生のゼミ及び4年生の有志メンバーの合同演習を対面と遠隔によるハイフレックス型で実施し、お互いの提案を講評し合うことができ大変有意義であつた。
- ⑦ 動画の扱い、成果物のとりまとめ方法は、昨年度とは比較にならないほど、学生のスキル(教員も同様)が向上した。昨年度は、パワーポイントとワードで成果をとりまとめたが、今年度は3チームともに動画での成果物提出となり、長足の進歩と言ってよい。

【課題と展望】

- ① 本授業が目標とする能力は、3チームの成果物からの直接評価に基づき、下表の通り、向き、不向き観点からまとめてみた。効果を達成するためには、授業の形態に合わせた工夫が必要である。遠隔授業でのアプリケーションの利用や、教室授業における機器などの準備だけではなく、例えばグループワークの進め方などの工夫が必要となる。

授業が目標とする能力	情報収集能力	論理的思考力	ディスカッション能力	文章作成力	プレゼンテーション能力
遠隔型	++	-	--	+	+++
ハイフレックス型	+	+	-	+	+
対面・教室型	--	++	++	+	+

- ② 情報収集能力の点で ICT を利用した講義の有効性が実感・確認されたことは、大きな成果と考えている。
- ③ ディスカッション能力は、対面での体験が非常に重要となってくる。コロナ禍の中で、どのような形で対面授業の機会を確保するかが一つのポイントとなる。また、掲示板を用いた時空を超えたコミュニケーションを遠隔授業に有機的に組み入れていく工夫も必要になる。
- ④ 論理的思考力・文章作成能力は、遠隔と対面どちらの方法でも可能である。遠隔型では、Teams の OneNote でテキストを共有しつつ実施したピアコリジェが有効であったが、それには時間が必要であり、今回のコマ数では難しかった。例えば、Miro のようなアプリを用いて、それぞれの思考や分析の流れを客観化する作業をワークの中に取り入れることができれば、比較的短時間で成果をあげられるかもしれない。
- ⑤ 次年度以降は、遠隔と対面とハイフレックスの利点を活かした形での授業の構成を考えてみたい。その際にはこの実験授業の特徴的な部分である時空を超えた掲示板でのコミュニケーションのプロセスを学生の自習やグループ学習のプロセスに組み込んでいく必要がある。

【フォーラムで使用した ICT ツール】

遠隔ゼミでは、Microsoft Teams を用いてそれぞれのレジюмеや意見書のシェアや、ピアコリジェなどを実施した他、Google Jamboard や Miro を用い、ブレインストーミングや KJ 法を用いてグループワークを実施した。

画像 1～3 は、3年ゼミの 3 コマ目・4 コマ目での Jamboard の記録である。記録が次週にそのままの方で持ち越され、次なる課題へのステップアップが学生自身の目に見える形になっている点も、模造紙ワークにはない。これらのアプリの良さであった。学生自身の満足度も、決して低くはなかったようである。

画像 1





機器の操作は、四年ゼミの有志が担当。また、機器などの設置に関しても、三年ゼミ生の有志が積極的に手伝ってくれた。それでも、初回は30分ほど、二回目は15分ほどの時間がかかった。

本学は、機器の操作などにSATAを使うことが可能だが、年度当初の手続きが必要なため、年度途中からのハイフレックス型授業の実施には間に合わなかった。

講義の様子は、次頁の写真を参照。

#### 講義の様子



教室に設置された広角カメラやスピーカーにより、遠隔参加者にも発表者だけではなく、教室全体の様子が分かるので、自宅からでもゼミに参加しやすい環境を整えた。また、発表者・発言者は、常にリモコン付きのカメラを使って、誰が話しているかが、遠隔参加者にもわかりやすいようにした。また、7回目のコマでは、Zoomの機能である「スポットライト」機能を使うことにより、比較的スムーズに遠隔とのやり取りが可能になった。

ハイフレックス型授業は、コミュニケーションが教室中心になりがちであるため、機器の配置なども含めて、工夫が必要である。今回は、報告者がたまたま全員教室参加だったこともあり、遠隔参加者と教室参加者とのコミュニケーションの確保が課題であった。機器の設置では、スクリーンの設置場所がとても難しく、試行錯誤しつつ進めた。

## 2. その他

### ① 令和3年度の実践

事務局案を基にして、以下の通り決定した。

令和2年度に実施した実験授業の有効性及び課題を踏まえて、フォーラム型授業モデルの進め方ガイドを作成する。その上で引き続き「コロナ社会でSDGsを考える」の観点から、格差問題、健康と福祉、働きがいのある人間らしい仕事をテーマに、分野を横断して解決策を議論・発表する実験授業を実施し、モデルの有効性を確認する。

### ② 次回以降の開催日程

6月19日(土)14時からZOOM会議で開催することとした。